

---

# ニルトニア物語

和泉 彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ニルトニア物語

### 【Nコード】

N5039S

### 【作者名】

和泉 彩

### 【あらすじ】

中学二年生の高井優一は、学校生活に馴染めず、友達もいなくつまらない毎日を送っていた。そんな彼の秘密の楽しみはオンラインゲームの「ニルトニア物語」。

ゲームの中では、友達もいて、明るくふるまえるのに、どうして現実では……？。ゲームと現実、どちらが僕の本当の世界なのだろうか？ 彼はいつも自問自答していた。

ゲームとリアルが交錯しながら、友情、絆を描くストーリー。

## 第一章 ニルトニアの世界 エピソード1 その1（前書き）

男子同士の友情の物語ですが、BLではありません。

あくまで友情を描いたつもりですが、途中、BLぽい描写がでてくるところがあります。不快に思われる方は、読むのを避けてくださいます。

処女作になります。

文章、ストーリー、まだまだ拙いです。

温かく見守っていただけると嬉しいです。

## 第一章 ニルトニアの世界 エピソード1 その1

『いつきに敵に切り込むよ！ レイン守りは任せた！』

『オーケー、シオン。耐えて見せるよ。僕の盾が破壊されるまでにちやつちやと終わらせてよ』

『分かっているって。すぐに敵をたたんじゃうよ』

僕、シオンと、相方レインは敵の真っ只中、お互い背中合わせで、呼吸を合わせた。

そして次の瞬間、僕は太剣で、サイのもっとでかくなったような敵を両断した。

『終わったね。ミッション無事コンプリート！』

楽しそうにいうのは、僧侶のマリナ。

僧侶といっても、彼女は現実世界で、坊さんをやっているわけではない。

このニルトニア物語という、架空のオンラインゲームで、僧侶という、味方を回復するタイプの職業についているのだ。

————ニルトニア物語。

それはオンラインRPGという分類のゲームだ。

RPGというのは、直訳すれば、何かを演じて楽しむゲーム。

たとえばマリナという一人の現実にいる人が、ニルトニアという架空の世界で僧侶になって遊んでいるように。

その上にオンラインとつくのは、普通のRPGと違って、一緒に冒険する仲間が、本当に現実に存在する誰かだ、ということ。画面でチャットしたり、戦ったりしているのはコンピューターではなく、実在する人間そのものなのだ。

だから、自然やりとりは、現実のコミュニケーションの取り方と似てきて、相手に気を使ったり、丁寧な言葉を選んでしゃべったりする。

まあリアルに存在しているといっても、匿名の人物なわけだから、やりたい放題やる人がいるのも事実ではあったが。

そんな中、このニルトニアには、たくさん小さな共同社会のようなものがあり、（このゲームではコミュニティという）、その中に僕とレインと他マリナを含めた10名程度の仲間が、さくらコミュニティという、同じコミュニティにはいつていた。

さくらコミュニティの仲間は、皆、気さくで、仲もよかった。とりわけ、僕と一緒にリーダー的存在を果たしているレインとは、阿吽の呼吸で通じ合える程、仲がよかった。

僕の職業が攻撃タイプの戦士。レインの職業が守備タイプの騎士。二人は、いつも互いの背中を預けて、難しいミッションをこなしたり、ときには、コミュニティから離れて、二人っきりの時間を楽しんだりしていた。

『今日は、気持ちよく勝てたねー。シオン、敵に攻撃しかけるタイミング絶妙だもん。』

僕の盾なんていらなくらいだよ』  
レインの言葉がパソコンの画面に表示されると、僕は少し照れくさくなった。

『そんなことないよ。レインの盾がしっかりしてるから、安心して背中を任せられる』

僕とレインがお互いを褒めあっていると、さくらコミュニティの私たちは、みんないつもおもしろがってちやちやをいれるのだった。

『まあた、この二人はラブラブモードでえ。もうニルトニアの教会で結婚式あげちゃえば』

『男同士のキャラって結婚できるの？』

『さあ？ でもお願いすればやってもらえるんじゃない？』

ニルトニアには教会があつて、そこで架空の結婚式を挙げる事ができるのだが、

『そんなの絶対嫌』

『そんなのお断りします』

僕とレインのセリフがほぼ同時に画面に表示される。

『あはは。やっぱりちょー息あってるじゃん』

『そういうマリナと僕は結婚してみたいなー』

レインがそういうと、

『レイン、やめとけて、マリナネカマかもしれないよ?』

僕も合わせて、憎まれ口を言う。

『ひっどーい。ネカマなんかじゃないもーん。ぷりんぷりんの女の子ですう』

『マリナ、ぷりんぷりんって、いくつなの?』

さくらコミュニティの中の一人が聞いた。

『女性に年を聞くなんて、失礼ね〜。ま、永遠の16歳ってコトにしておいて』

年齢、性別、名前、職業、住所、電話番号、メルアド、そんな個人情報、よほど仲良くなつた相手でなければ、知るよしが無い。

そうなんだ、こんなに身近に、チャットしているのに、相手はものすごく遠い所にいるかもしれない……。

すぐにも手が届くパソコンの画面にキャラクターは映し出されるのに、こんなに近くにいる気がするのに、皆、一体どこで何をやっているのか分からない。

## 第一章 ニルトニアの世界 エピソード1 その2

さくらコミュニティの中の僕は、明るくて気さくな人物だった。だけど、現実が違う。

友達さえ一人もない、根暗なゲームオタク。

どうしてニルトニアにいるときと、こんなにも自分は違うのだろう。匿名だからだろうか？

いや、違う。そんなことにはとうの昔に気づいていた。

……レインがいたからだ。

僕は、どちらかといえば、社交性のない、人間づきあいの下手な性格だった。

だから現実の学校では友達だっていないし、作ろうとさえ思わなかった。

そんな僕が唯一心を許せる存在、それがレインだった。

何故レインにだけは、心を許せるのだろうか？

僕は何度か自分自身で考えてみたことがあった。

レインは聞き上手で、ときにまた話し上手で、僕を委屈させないし、僕が一人静かに過ごしたい時は、すぐに察して、何もしゃべらずただ側にいる。

レインは僕じゃない他の誰かと違って、うまくやれるに違いない。

だけど僕はレインじゃないとダメなんだ。

僕は結局、その結論にいつも辿り着くのがあった。

僕は一人静かな部屋で、ため息をついた。

ニルトニアと現実の世界が逆だったらいいのに……。

『それじゃ今日はミッションお疲れ様でした。そろそろ落ちます。おやすみなさい』

『俺も落ちる。おやすみ』

さくらコミュニティの人たちが次々、おやすみの挨拶をするのを見て、僕は時計に目をやった。

もうすぐ午前0時であった。

今日は火曜日だから、明日は学校がある。

僕もそろそろ落ちて、眠らなければならぬ。

『おつかれーっす。僕も寝ます。おやすみなさい』

皆と同じようにおやすみの挨拶をして、ログアウトして、パソコンの電源を切った。

その瞬間、先ほどまで輪を囲んで楽しくやっていた人々が、引き潮のようにさーっといなくなっていくような感覚を、僕は覚えた。

そして、楽しく愉快だった気分は一転して、鬱々とした気分になった。

僕は、ベッドにもぞもぞと入っていった。

そして、いつも決まって眠る前にやるお祈りをした。

(どうか明日が来ませんように)

そうして明日の来ないことを願っているうちに、僕はいつの間にか眠りにつくのだったが、今日は違った。

レインのことを知りたい。

レインのことが知りたい。

僕が、ニルトニアの世界の中で、別人のような僕でいられる、こんなにも僕を変えてくれたレインのことが知りたい、となぜか、今日は強く思った。

(だけど、リアルのレインに一步近づく勇気がない)

もし、何かを尋ねて、断られたら？

それがきっかけで、二人の友情が壊れてしまったら？

僕はもう二度と立ち直れない。

それほどに、僕の中で、レインという、存在は大きくなっていった。

そしてその反面、僕の現実世界のことは、僕の中でどうでもよくなっていた。

僕はただ

現実から逃げていただけかもしれない。

いや、それでもいい。



例えかりそめの僕の姿でもいいから、ニルトニアにいる明るい僕で  
いたい。

(どうか明日が来ませんように)

僕はもう一度、お祈りをした。

そのうちに僕はいつの間にか眠りに落ちていた。

## 第二章 現実の世界 エピソード1 その1

残念ながら、翌日の朝、僕は目覚めた。  
ちやんと明日はやってくるのだ。

僕はしかめつつらをしながら、学校へいく支度をした。

パンとハムエッグという簡単な朝食をすませると、僕は外へでた。

(寒い)

もう十一月も終わろうとしている。

少し冷たい風が、僕の頬をなでた。

僕は空を見上げた。

雲ひとつない快晴の空であった。

僕は空を眺めるのがなぜか、好きである。

つまらない授業中だって、窓際の席に座っている僕は、空を眺めて  
さえいれば、ちっとも退屈せずにすんだ。

だけど、僕にとって本当に苦痛なのは、授業の時間なんかではない。  
たとえば、理科の実験とか、技術の時間、家庭科の実習などの時間  
は、どうしても同じ班のクラスメートと協力して何かをしなければ  
ならない。

その時間が、僕にとっては何にも勝る苦痛の時間だった。

そして、今日僕の心はいつにもまして、あまり愉快になれない。

なぜなら理科の実験が3時限目にあるからだ。

\*

学校についた僕は、ただ何かの事務手続きをするように、決まった  
事をした。

靴箱に靴をいれ、あまり綺麗とはいえない、濃い緑色の室内用スリ  
ッパに履き替える。

階段を登って、3階の教室に何も言わずに入って、窓際の真ん中近

くの席に腰を下ろして、通学用バッグから、教科書を取り出して、引き出しにしまう。

すべて、休日を除いて毎日行われる、平坦な作業だった。

周囲では、「おはよー」「おはよー。きのうのテレビ見た?」「えーどんなやつ?」

などとクラスメートが会話しているが、僕は無関心だった。

中学2年生の僕は、4月にこのクラスに入ってから今日まで、ほとんどクラスメートと話したことがない。

別にいじめられているわけでも、阻害されているわけでもなかった。ただ僕が誰とも交わろうとしなかっただけだ。

僕の存在はきつと、クラスの中では空気のような存在になっているのだろう。

確かにそこには存在しているのに、別に気に留めるほどの存在でもない。

僕はそんな、自由で気楽な環境が気に入っていた。

だけど、心のどこかで、ほんのちよつとは、普通にみんなとしゃべったり遊んだりしたい、という欲望があったことは隠せない。

しかし、そんなことはとうの昔に諦めたことだ。

いまさら、誰と仲良くなる気もないし、そんなそぶりをみせる僕に話しかけるクラスメートだっていない。

そう、僕にはニルトニア物語がある。

あそこできいき生活している僕が本当の僕であり、レインをはじめめとするたくさん仲間がいるのだ。

それで十分。

(十分じゃないか)

僕はいつもそう自分に言い聞かせていた。

## 第二章 現実の世界 エピソード1 その2

1時限目、2時限目と、その日の授業も空を眺めている間に終わり、いよいよ、僕の苦手な理科の実験の3時限目が始まるうとしていた。理科の実験教室に移動した僕は、教室のとは違う実験専用のテーブルについた。

理科の教師が、今日の実験のやり方について、淡々と説明していく。そしていよいよ、班の皆と協力してやらなければならない実験が始まった。

僕は少し後ろに下がって、班の皆が実験を行うのを眺めていた。すると、

「高木君、そのビーカー取って」

と、同じ班の誰かが言った。

僕は一瞬誰か違う人の事を言っているのだと思ったが、すぐにクラスメートが僕の名前を間違えているのだ、と気づいた。

僕の立っているすぐ後ろにビーカーが並んでいたからだ。

しかし僕は高木、ではなく、高井優一という。

(違っていて、高井だって)

と、あわてて、同じ班のクラスメートの誰かが、僕の名前を間違えたクラスメートにささやくのが聞こえた。

そうか、僕は、4月にこのクラスに入って、もう年も終わりそうだというのに、名前すら覚えてもらえていないのか。

僕は、かなり落胆した。

「あ、そうだった、高井君、悪いけど後ろのビーカー取って」  
全然悪びれもせず、僕の名前を間違えたクラスメートは、そう言った。

僕は黙って、ビーカーをテーブルの上に置いた。

その後、どう実験が進んで、どう終わったのか僕は覚えていない。

ただ、名前すら覚えてもらえていなかったことのショックが忘れら

れなかった。

（僕はこの世界にいる意味があるのだろうか）

僕はこんなリアルだったら消えてしまえばいいのに、と思った。

しかしすぐに、どうせ空気のような存在なのだから、名前なんて覚えていてもらわなくて、当然なのだ、という諦めじみた考えに変わった。

ニルトニアの人は、僕のことを、ちゃんと『シオン』って呼んでくれる。

そうだ、僕にとっては、あちらがリアルなのだ！

### 第三章 ニルトニアの世界 エピソード2 その1

『こんばんは〜』

僕が、キーボードで文字をつつと、

『ちわーっす』

『こんばんは』

『ども〜』

と、さくらコミュニティの人たちから挨拶が返ってくる。

家に帰ってからすぐ、親に薦められた学習塾に通う日以外は、ニルトニア物語にインする。

これも僕がほぼ毎日やっている習慣だったが、こちらはちっとも、事務手続きのような気がしなかった。

むしろ、人の温もりなどないはずなのに、文字を読むと暖かい気分になった。

いつものようにレインもいる。

僕はそれだけで、心が浮き立つような感覚を覚えた。

『それにしても、シオンも暇だよ〜。ほとんど毎日インしてるじやん』

『そういうマリナも、毎日いるってことは相当暇なんだろう？』

『むう。私は、忙しいなかシオンたちに会いに来てあげてるのよ』

『それはどうも。ごくろうさまなことだ』

『むつきー。シオンは素直じゃないわねえ』

マリナのふくれっ面が目に見えるようでおかしかった。

そうだ、僕は、学校で笑ったことが一度もなかった。

僕は少し今日の理科の実験のことを思い出して、苦い味を噛んだような気がしたが、せつかく僕の大好きなニルトニアにいられるのだ、そんなことはさっさと忘れた方がいい。

『なあレイン。ニルトニア大辞典に書いてあったんだけど、リングエールの奥地に、レアもののモンスターがでて、結構お金になるん

だつてさ。今からそこいかない？』

ニルトニア大辞典というのは、ニルトニアでの、色々な生活の仕方から、細かい戦術まで載っている万能的な攻略本である。

『いいよ。リングエール待ち合わせ？』

『んだな。入り口とここで落ち合おう』

僕たちはいつものようにニルトニアで遊ぶ場所を決めてそこへ向かった。

\*

リングエールの森の入り口に着くと、もうそこにはレインが、立っていた。

がっちりした、白い騎士の鎧に身を包み、右手には、銀色の下地に青色で細工がしてある片手剣、左手には、控えめな金色の盾を持っていた。

いつものレインの格好だ。

しかし、よくみると盾の模様がいつもと違っていた。

『あれ？レイン。盾変えた？』

『ふふ。ばれた？ これ、ちょっと高かったんだ。 お金貯めて買ったんだよ。』

これでもっとシオンの盾として、頑張れる』

僕はなんだかこそばゆい気分になりながら、背中にしょっていた、大剣を振りかざした。

『奇遇だね。僕のこれも、買ったばかりなんだ。僕の方も結構高かった。 もうお財布の中身はすっからかんだよ』

『あはは。でもこれからレアもののモンスターやって一儲けするんだろ？ ちよつどいいじゃない』

『そうだね』

### 第三章 ニルトニアの世界 エピソード2 その2

二人はリングエールの奥地の森を、時間をかけて探索した。

すると、リアルタイムで1時間ほど経った頃、他のモンスターよりひときわでかいモンスターが現れた！

『レイン！ あいつそうかな？』

『たぶん。名前も他のモンスターと違ってるっ！』

『よっしゃー。一気に切り込むから援護お願いっ！』

『わかった』

それからしばらくの間、僕とレイン対モンスターの戦いは続いた。

レアものだけあって体力がやたらあるので、なかなか僕の新しい剣でも、とどめをさすことができない。

その瞬間、ふとリアルな僕のすぐ近くで、どたつとなにかがおちる音がした。

僕は驚いて一瞬画面から目を離した。

そして音のした方を見ると、棚からCDが一枚落ちたのだった。

なんだCDか…、とほっとして画面に目を戻すと、僕に向かってモンスターがまさに一撃をくらわそうという瞬間だった。

「あ」

僕はなんとか操作をしようと試みたが、もう遅い。

僕がCDに気を取られていた間に、僕は無防備状態になっていた。

『危ない、シオン！』

突然レインが金色の髪をなびかせて僕の前に現れ、薄い金色の盾でモンスターの一撃を受けた。

『レイン』

ガキーン。

モンスターの攻撃とレインの盾が激しくぶつかり合う。

『シオン、大丈夫？』

『レインこそ大丈夫？ ごめん、ちょっと集中とぎれてた』



僕は、レインに一撃をふさがれ、もう一撃くりだそうとしているモンスターに、間髪入れずに大剣を振り下ろした。そしてやっとモンスターは倒れた。しかし、戦利品はハズレのモノだった。

### 第三章 ニルトニアの世界 エピソード2 その3

『ゴメン、レイン。リアルで一瞬目を離しちゃった』

『いいよ、いいよ。シオンが無事でなによりじゃない』

『レインが体張って守ってくれたおかげだよ』

『僕は騎士だからね。守るのが役目だよ。』

シオンがピンチになったらどこへだって駆けつけて、必ず守る』

僕は、レインになんて返せばいいのかわからなくて、ちょっと戸惑ってしまった。

『でもレインはみんなの騎士だろ？ みんなを守らないと』

『ミッシヨンとかのときはね。だけどシオンが困ってたら一番に守るよ』

『ありがとう』

レインが何を言いたいのかわく分らなかったが、きっと友達として困っているときは助け合おう、みたいなことが言いたいのだろうと、僕は解釈してお礼を言った。

そして、なんだか照れてきたので僕はわざと話題を変えた。

『あーあ。空振りかあ。けっこう頑張って倒したのになあ』

『しょうがないよ。そういう時もあるって。』

でも、シオンと一緒に遊べただけ僕は満足なんだけどな』

『僕も……』

また……

レインの嬉しからせの言葉に、僕は顔が赤くなった。

僕は、レインのことが好きなのだろうか？

いや、もちろん友人としては好きである。そうではなくて、こんなふうに赤くなってしまうのは、レインに恋愛感情を抱いているからなのだろうか？、僕はホモなんだろうか？（レインが男と決まっているわけではないが。ゲームの世界では、リアルの世界と別の性別のキャラクターで遊ぶ人もいるのでわからない）と、何度か考え

たことがあった。

しかし答えはノーだ。

僕は今通っている中学校だけでなく、どこにいても一人浮いていた。どんな現実世界でも僕は、人間関係がうまく作れず、おのず友達も作れず、いつも一人ぼっちだった。

そんな僕にできた初めてにして、唯一無二の親友（と僕は勝手に思っている）が、レインであった。

だから、僕にはあまりにも新鮮すぎて、レインの一言一句が、僕をドキドキさせる。

そう、僕は人間に飢えていたのだ。

リアルの世界で、一人が好きだななどと、自分自身に言い聞かせ、思い込ませようと必死になっていた僕は、やはり人の温もりを求めていた。

少し優しい言葉や、温かい言葉を聞けば、僕はそれが、自分に向けられたものだと思えることができずに、少しの間、動揺してしまう。顔が赤くなったり、ドキドキしたりするのもそのせいなのだ。

きっと、他の人がごく普通に当たり前に、しゃべったりする言葉が、僕にとってはものすごく衝撃的な言葉として心に刻まれているのだろう。

そんなことを考えると、なんだか、僕のリアルがいかにもじめであるかと思って情けなくなったり、それでも、僕だって本当はニルトニアにいるときのように、ちゃんとした人間関係が作れるのだ、ということを嬉しく思ったり。

僕の心は複雑だった。

ただ、ひとつ確かなことは、僕はレインが大好きで、彼とともに過ごすのが楽しい。

……でも、レインはどう思っているのだろうか？

僕は今まで、自分が楽しいことばかり考えていて、レインが僕と過ごす時間をどう思っているのかなんて、気にしたことがなかった。それを考えると、僕は急に不安になった。

レインだつて、もしかしたら、今日理科の実験で僕の名前を間違えたクラスメートみたいに、僕のことを空気だと思っているのかもしれない。

いや、そんなことはない。

レインは一度だつて、僕の名前を間違えたりしなかったのだから。などと、自問自答しても、答えは見つからなかった。

レインに聞いてみようか？

でももし、僕と遊ぶことをつまらなく思っていたら…。友人だなんて思い上がりも甚だしかったら……。

『どうしたの、シオン。』

急に黙っちゃって』

レインが僕の顔を見つめて言った。

僕は、心の中を見透かされたのかと思つて、びっくりして、レインを見つめた。

『あ、いや、そのさ、レインは、ニルトニアで、僕とばかり遊んでいて、つまらなくなるのかなーとか、思ったりしてたんだけど…』僕は勇気を振り絞つて聞いてみた。

ニルトニアで、どんな強敵と対峙するときも、こんなに、コントローラーを握る手が汗ばんだりしないのに、僕の汗は止まらなかった。レインが答えるまでの時間が、僕には永遠とでもいうくらい、長い長い時間に思えた。

『何言つてるの、今更。僕たちは、大親友でしょ？』

そのレインの言葉が画面上に映し出されたとき、僕は、自然と涙を流していた。

生まれてから、こんなに嬉しかったことってあっただろうか？

普通の人には大げさに映るかもしれない。

でも僕は、心底、嬉しかった。

ただただ、嬉しかった。

僕は、こんな泣いている姿が、画面上に映らなくて良かった、と思つた。

レインはきつと、困ってしまっただろう。

『そうだね。僕たちは大親友だ』

僕は涙をぬぐって、画面にうちこんだ。

「……………僕たちは大親友だ。」

僕が生まれて初めて作った友達は、真っ白な鎧に身を包み、銀色の剣と、金色の盾を持つ、最強の騎士だ！

いいじゃないか、これがたとえ、かりそめの、いつまで続くのかも分からない、非現実の世界であったとしたって。

僕らが友達同士だということには、どこにも変わりはないのだ。

『で、早速大親友のレイン君に頼みごとがあるんだけど』

『なにになに』

『百万ゴールド（ニルトニアでの通貨である）ちょうだい』

レインは一瞬呆れたのか、少し間をおいて、

『嫌』

と返事が返ってきた。

僕は、自分の部屋の中で一人笑い転げていた。

## 第四章 現実の世界 エピソード2 その1

いつもと変わらず、今日も朝がやってくる。

学校へ向かうため家を出た僕は、毎朝の習慣になっていることなのだが、空を見上げた。

今日はいいにく青空ではなく、曇り空であった。

でも僕は、青い空も好きだが、どんな空だって好きだった。

激しい雷雨の空だって、真っ白な雪を降らす空だって、黄砂が舞い散る空だって。

空は毎日違う景色を僕に見させてくれる。

青空ひとつとっても、雲があるのかないのか、鳥は飛んでいるのか、いないのか、朝日がでたばかりなのか、夕日がせまっているのか、違いは色々あった。

だから僕は空をなんとなく見上げて、眺めているのが好きなのだ。ひとしきり空を眺めたところで、僕はまた憂鬱なことを思い出した。今日の4時限目に家庭科の調理実習があるのだ。

作るものはビーフシチュー。

別にビーフシチューだからといって何かあるわけではない。

またこの間の理科の実験のように、同じ班のクラスメートと協力してやらなければならぬのが嫌だった。

僕は昨日レインと遊んだ時間となんとという落差だろうと思った。

（現実の世界なんてなくなってしまうばいい。そうだ、その代わりにニルトニアが現実になればいいんだ！）

僕は、そんなことを思いながら登校した。

そしていつもの小汚い濃い緑色のスリッパをはいて、教室に入った。

\*

4時限目は、すぐにやってきた。

僕は家庭科の教科書と、ビーフシチューの作り方が印刷されたプリントを持って、教室をでた。

こういった教室移動の時も、人はなぜか群れたがる。

その人数は、2・3人だったり、10人くらいだったり様々だが、僕のように一人で教室移動をする生徒はいなかった。

だから、僕は余計に孤独感を感じざるを得ない。

どうして、たかが、家庭科の調理実習教室に移動するだけで、人は群れなければならないのだろうか？

人はそんなに孤独が怖いのか、それともまだ中学2年というのがガキなだけなのか…。

僕は、楽しそうにしゃべりながら廊下を歩くクラスメートと、少し距離をとって、廊下のはしを歩いた。

実習室は1階の一番端の暗い部屋だった。

3階の奥から来るにしたって、なんてことない距離だ。

別に、人と群れてくる距離じゃない。

そうやって、皆のやっていることを、僕がおかしいんじゃないんだ、皆がおかしいんだ、と納得させなければいけないのは、僕が誰より人と共にいたいことの証なのだが、このときの僕はまだ、そのことに気づいていない。

僕はただ、皆が皆そろって楽しそうにやっているのが変だと思っていた。

## 第四章 現実の世界 エピソード2 その2

家庭科の実習は、簡単な先生の説明が終わるとすぐに始まった。

班の女子が、嬉しそうにレシピを見ながら、わいわい言っている。

「ちよつとー、男子たちも何かやりなさいよー。」

ほら、ボウルと、なべ取ってきて」

「はいはい」

僕の班の男子二人が、肩をすくめながら、ボウルとなべを取りにいった。

僕は、どうせ男子のうちにもはいつていないのだろう。

そう思って、また理科の実験のときのように、少し後ろに立っていた。

順調に調理はすすみ、（主に女子がやった）、おいしそうな匂いがたちこめてきた。

しかし僕は食欲なんて、全然ない。

他の班も全て作り終えたところで、食事タイムとなった。

僕は、ビーフシチューを機械のように、スプーンですくって食べた。

「おいしい」

「ねー。男子たちは食べてるだけでいいわねえ」

「オレたちだって、米洗ったりしたじゃん」

「はいはい、少しくらいはやってくれたけどね」

女子たちはクスクス楽しそうに笑い、男子たちは、がっがっビーフシチューを食べる。

そんな一枚の写真に、僕は写っていないかのようにだった。

皆が食べ終わった後、今までの調理実習において、何一つやっていない僕の仕事の番がやってきた。

仕事の番がやってきた、といつても、誰かにお願いされたわけでも、命令されたわけでもない。

僕が、もうあと3月まで5ヶ月足らず、を、このクラスで空気のよ



うに過ごせるように、いじめられないために、僕が進んでやることだ。

進んで、といっても、全然やりたいことではなかったけれど。

僕は皆が平らげた、皿やスプーン、なべ、調理器具を、ゴシゴシスポンジでこすって洗った。

ただ無心に、スポンジを動かした。

班の皆は、食後のだんらん、みたいになにか皆でしゃべっている。僕はその横でただひたすらスポンジを動かし続けた。

調理実習の後片付けなんて、一番誰もやりたくない仕事だ。

でも、班の誰かと協力して何かをするくらいなら、誰もやりたがらないことを一人で黙々とこなすほうが、僕にとって、何倍もマシだった。

それに、食後のだんらんにも入っていけない僕が、静かに座っているより、スポンジをこしこすっているほうが、ずっと自然だ。

僕のこんな冴えない毎日を知ったら、レインどんな顔をするだろうな……。

ふと、無心だったはずの僕の頭にレインが浮かんだ。

そう思うと少しおかしくなった。

そうか、つまらないリアルでも、ニルトニアのことを考えればいいのかもしれない。

ニルトニアでの僕と、今こうして一心にスポンジでなべをこしこすこすっている僕を対比させたら、レインだって、マリナだって笑い転げるに違いない。

僕は心の中で、笑いながら、後片付けを続けた。

## 第五章 ニルトニアの世界 エピソード3 その1

その日の夜はあいにく、学習塾に通う日だった。塾から帰ると、もう9時になっていた。

空を見るのが大好きな僕は夜空も好きだった。

が、そんなことより、早くニルトニアの世界へ行きたくて、僕は急いでいた。

「優一、ご飯は？」

足早に階段をのぼる僕に母親が聞いた。

「いらぬ。塾の隣のコンビニでおにぎり買って食べたから」  
母親のことだ、きつと、塾から帰った後も、僕が急いで階段をのぼるのは、一人、自室にこもって、勉強するとも思っているのだから。

それ以上、何も聞かれなかった。

都合のいい想像だが、いつものことだ。

学校のこと、何も母親は聞いてこない。

何も言わないからうまくいっていると思っっているのだろう。

僕のほうも、あまりうるさく関与されるよりよほどマシだったから、勝手に誤解しておけばいいさ、と思っていた。

そしていつもの通り、僕は、ニルトニアのゲームにインした。

しかしいつもと違っていたのは、この間の理科の実験から今日の家庭科の実習まで、リアルで憂鬱なことが、続いていたため、さくらコミュニティに入らなかった。

「……なんとなく僕は、皆とわいわいさわぎたい気分ではなかった。」

## 第五章 ニルトニアの世界 エピソード3 その2

鮮やか過ぎる緑色の草原。

木も不自然なほど綺麗な茶色の大木に、黄緑色の葉をつけている。でも、時折吹く心地よさそうな風に、草が、木が、揺れているのは、まるで現実の世界のものとそっくりであった。

そして、僕の隣には金髪のストレートの髪を揺らしているレインが座っている。

『ずっと、このままこんな時間が続けばいいのに』

『続くといいね』

レインは僕のほうを向いて言った。

顔はこっちを向いているけれど、それはあくまで、架空の世界のレインの表情だ。

画面の向こうのレインがどんな顔をして言っているのか、僕は気にならなかった。

『今日は狩りをしたい気分じゃない』

『うん』

その後、またひとしきり沈黙が続いた。

レインは……

どこで何をやっている人なの、と聞こうとして僕はやめた。

聞いて答えが返ってこなかったら悲しいし、そんな現実にはふみこんだ質問のせいで、レインと気まづくなってしまうのが怖かった。

『シオンはいつもどんなことをしてるの？』

僕はレインが何を聞きたがっているのか分からなくて、動揺した。

僕が何をしているかだって？

それは普通に中学校に通って、普通に親に薦められた学習塾に通っているほかは、ほぼニルトニアで生活しています。っていったらいいのか、いやそんな具体的な話は避けたほうがいい気がする、などと僕の頭はほんの数分の間一生懸命フル回転した。

『空を見ている』

とっさに僕の口から言葉が出てきた。

いや、確かに、僕は空を見るのが好きだ。

僕のクラスでの座席は窓際だったし、勉強にも、有名進学校への進学にも興味のない僕は、授業だつてろくにきいておらず、ほとんど空を見て過ごしていた。

学校の先生だつて僕が、ぼかんと空を見て授業を聞いていないことくらい知っているだろう。

だが、無関心な生徒に、何を言ってもしょうがないと思っているのか、僕に注意する先生はいなかった。

『空を見ているのかあ。いいね、そういうの』

レインのキャラクターは、ぼくから視線を外し、ニルトニアの雲ひとつない真っ青な空を見上げた。

つられて僕も、こんなにも毎日入っているのにほとんど見たことのない、ニルトニアの世界の空を見上げた。

『綺麗だね』

『うん、でも現実の空って、時には鳥が飛ぶし、雲だつて流れるし、雨が降るときもある。』

そしてそのあと綺麗な虹がかかることもある。  
見ている飽きないな。

なんていうんだろう。予想のつかないことがゆっくりだけど次々起こって、楽しいんだ』

(まるでレインと過ごしているときのようだ)

僕はこっさり心の中でそう付け足した。

『なんだか奥が深いね』

『そんなこともないよ。僕の現実なんてつまらないものさ。だからニルトニアにいる』

『現実がつまらないの？ それは寂しいね』

レインは悲しそうな表情をした、気がした。レインはあくまでゲームのキャラなのだから、いったいどんな表情をしているかなんてわからない。

（ああ現実の世界にレインがいたらよかったのに……）

それは僕がレインと出会ってから何回も考えたことだった。

そうしたら、ニルトニアでのふたりのように、無二の親友になれたかもしれない。

僕をつまらない毎日が、どんなにか素晴らしい毎日に変わるかもしれない。

## 第五章 ニルトニアの世界 エピソード3 その3

『もう随分時間経ったね』

レインの言葉にはじかれたように時計を見上げると、もう午後11時をまわったところであった。

ゲームに入ったのが、学習塾から帰ったあとの午後9時だったから、2時間レインとすごしていたことになる。

『そろそろ眠らないとな』

僕はいつもレインと分けられるときの寂しさを感じながらそう言った。僕は社交性がないだの、人付き合いが下手だの言いながら、実は人の温もりに飢えているのかもしれない、とふと思った。

『ねえ、シオンっておまじないとか信じる方？』

唐突にレインが尋ねてきた。

『僕はあまり信じない方だな。それやるなら、具体的にこちらから何かしたほうが、まだ結果がついてくる気がする』

僕は、眠る前に、每晚必ずするお祈りのことを考えたが、明日がくるのは分かりきっている訳で、あれはおまじないというより、儀式に近い、と僕は思った。

『気が合うね。僕もそうなんだ。だけど今日だけは信じてみない？』

僕のおまじない』

画面の向こうのレインはまるでいたずらっ子のようにニヤニヤ笑っているような気がした。

僕はレインが何を言いたいのか分からなかったけど、そんなレインは嫌いじゃない。

『いいよ。それでどんなおまじないをしてくれるんだい？』

『シオンが現実でも、ニルトニアにいるときと同じくらいおもしろい毎日がすごせますように』

僕はレインが画面に打ち込んだ文字を見たとき、かあっと顔が真っ赤になっていた。

『ありがとう。それじゃあ今日は寝る。また明日』

僕がもし面と向かってレインにそんなことを言われたら、きつと、「あ、あ、ありが、とう」って動揺しすぎてどもってしまつに違いない。

動揺を隠せたのは、文字を打ち込む必要があり、その時間が僕を落ち着かせてくれたのだ。

『おやすみなさい、シオン』

レインのその文字を見た直後僕はゲームからログアウトした。そしてログアウトして、ゲームの電源が切れた後も僕の心臓はドキドキしていた。

急いで布団にくるまったけれど、そんなんじゃ高ぶつた感情は抑えられそうになかった。

まだ、僕の冴えない現実は何一つ変わつたわけではないのに、僕の現実にレインが手を差し伸べてくれたような気がした。

レインは不思議な人だな…。

本当にレインと現実で会えたら…。

レインの前だったら、僕は勇敢にモンスターを狩ることもできたし、明るく皆の前で振舞うことだってできた。

冗談を言い合うこともしよっちゅうだった。

僕たちは、さくらコミュニティの中で、皆を引っ張る役割を果たすくらいまでになっていたのだから、一体現実の僕と何という差だろうか。

僕の本来の姿はどちらだろう？ と考えることがよくあった。

しかし決まって僕の答えは、本来の僕の姿は、現実世界の鬱々とした僕、であった。

なぜなら、ニルトニアでの明るくて気さくな僕は、レインがいつも傍らにいてくれたからこそ存在できるものだったからだ。

明日の朝目を覚ませば、また僕はつまらない人間に変わる。

そう思うと、先ほどの高揚感は萎え、急に何もかもモノクロームの世界に染まってしまったような気がした。  
僕は、明日が来ませんように…と祈りながら、眠りについた。



## 第六章 現実の世界 エピソード3 その1

次の日1時限目の授業は数学だった。

別に国語だろうが、社会だろうがなんだって僕にとっては一緒なのだが。

僕は当たり前のようにきてしまった朝に顔をしかめながら、いつものように頬杖をついて、空を眺めていた。

ニルトニアの空とは違い、薄い青、濃い青、白い雲そんな色のグラデーションが美しい空だった。

ふと気づくとつばめが低く飛んでいた。

(雨が降るな)

僕はちつと舌打ちをした。

今日はいにく傘をもってきていない。

だけど、雨があがった後には、綺麗な虹がかかるかもしれないじゃないか。

それに雨粒が、ガラス張りのショーウィンドーなどにかかると、きれいな宝石みたいな色に変わったりする。

雨だって悪いことばかりじゃない。

今日の空はどんなふうになら変わるっていくんだらう？

などといったもののように熱心に空を眺めていた僕は、ふと今日が、さくらコミュニティの、特別攻略日であることを思い出した。

さくらコミュニティには10人ほどの人がいて、全員そろって一週間に一度、特別に何かを攻略する日があるのだが、それが今日なのである。

さくらコミュニティのリーダー的存在である僕とレインが、何をやるのか、それをどう攻略するのか戦術をたてるのが、いつもの習いだった。

しかし、昨日はすっかりそのことを忘れて、レインと全然関係ない話に終始してしまった。

僕は机の引き出しの中から、そーっと「ニルトニア大辞典」と書かれた本を取り出し、数学の教科書の下に忍ばせた。

僕は数学の教科書を読む振りをしながら、ニルトニア大辞典をめくった。

（今日は何やるかなあ）

10分ほど、考えていたが、今日に限って、やりたいことが出てこなかった。

僕は諦めて、まあ、今日ゲームに入って、レインに決めてもらってもいいしな、などと他人任せなことを考え、また飽きもせず空を眺めた。

## 第六章 現実の世界 エピソード3 その2

気づくと1時限目の数学が終わるチャイムが鳴っていた。

1時限目と2時限目の間には10分のトイレ休憩がある。

数学の授業が終わったのだから、本当は堂々と見ていいニルトニア大辞典を、僕はまたこそそとめくった。

僕のことなど、クラスの誰も気にしていないのは知っている。

しかしもし僕がそんなゲームをやっているのを誰かに知られたら、根暗の上に、ゲームオタクなんてレッテルも、追加で貼られなければならなくなってしまう。

でもどうせそんなことばれるわけないのだが…

「高井君、それ、ニルトニア大辞典だよね？」

僕は突然、背後からかけられた声に思わず声をだしてしまうほど驚いて、おそるおそる振り返った。(なんとか声をださずにはすんだ)しかし、その声の主を確かめた僕はより一層の驚きを隠せなかった。なぜなら、彼は生徒会役員も務める学業優秀、スポーツ万能、見た目が女性のように綺麗だと噂され、女子に人気ナンバー1の、藤崎涼だったからだ。

「あ、ああ、うん。そうだけど…」

僕はなるべく教室内のほかの誰かに気づかれないよう、小さく答えた。

すると、藤崎涼はみるみる笑顔になった。

「偶然だね！ 僕もニルトニア物語やってるんだ？ ねえどんなキヤラでやってるの？」

え？ 彼がニルトニア物語をやっているだって？

僕は藤崎涼の確かに女性の雰囲気のある中世的な顔をしげしげと見た。

「僕、初めて会ったよ。ニルトニア物語やってる人と！嬉しいな。」

藤崎涼が心底嬉しそうに微笑むので、僕はなんだか最初こそこそしていたのが逆に恥ずかしくなって、今度は照れてしまった。

「藤崎、ニルトニア物語ってなんだよ。」

気づくと僕の机の周りには人ばかりができていた。

藤崎涼が、大きな声で嬉しそうにはしゃぐものだから、藤崎涼の友人たちやら、興味本位でのぞきにくる人やらで僕の周囲は急にごったがえしたのだった。

「ニルトニア物語っていつてね、オンラインRPGだよ。」

「RPGってドラクエみたいなモン？」

「そうだね。ただニルトニア物語はオンラインだから、中の人はほとんど全部本物の人が操作してるんだ。」

「へえ、おもしろそうだね。」

周りにたかった人たちに藤崎涼は丁寧に説明していた。

「高井君はそういうの、好きなんだ。」

「う、うん。まあ。」

僕は、このクラスに入って、初めて誰かと話したかもしれない！、と思いながら緊張して相槌を打った。

「すごいね。」

突然、藤崎涼と同じ事をやっている、というだけのもので、まるで僕まで藤崎涼のような人気者扱いであった。

（わ、悪くはない…な）

こうやってクラスメイトとわいわい話すのは初めてであったが、まるで、ニルトニアにいるような錯覚に僕は陥った。

一緒……なのかもしれない。

現実だって、オンラインゲームの世界だって。

そのときふと、僕は昨日の夜、眠る前にレインがしてくれたおまじないを思い出していた。

『シオンが現実でも、ニルトニアにいるときとおなじくらい、おも  
しろい毎日がすごせませますよっ！』って

脳裏をよぎったレインの言葉。

(まさか…な)

## 第六章 現実の世界 エピソード3 その3

そのとき、2時限目の始まりを知らせるチャイムが鳴った。

周囲の皆は、まだニルトニア物語について、知りたいようだったが、しづしづ席に戻っていった。

その帰り際、

(今度、二人っきりのとき、ニルトニアの話、しようね)

と、藤崎涼は言い残して、去っていった。

僕は、まるで、女の子に告白を受けたかのようにドキドキしていた。

藤崎涼と僕だけの、秘密の話。

誰にも好かれる人気者の藤崎涼を独り占めして。

\*

藤崎涼と二人っきりになれる時間は思いのほか早くやってきた。

僕の予想通り、学校の授業が終わる頃には、雨がひどく降っていた。

僕は、もう少しやむのを待って帰ろうと、靴箱の前で空を見ていた。

「高井君、もしかして傘持ってきてないの？」

背後から聞き覚えのある高いトーンの声がして僕は振り返った。

やはりそこには藤崎涼が、立っていた。

「僕、傘持ってるからよかったら途中まで一緒に帰らない？」

(……え?)

僕も藤崎涼も細身だったから、一本の傘にはおさまるだろうと予想

はできたが、想像して僕は真っ赤になってしまった。

そして真っ赤な顔を見られるのが恥ずかしくて、僕はうつむいた。

「で、でも、藤崎君濡れるとかぜひくし、僕はほんやり空を眺めながら待っているのが好きだから、いいよ」「

僕は精一杯の言葉を搾り出した。

「そんな遠慮しないでよ。ニルトニア物語の話も聞きたいしね」「彼はにこにこしながらそう言った。

それ以上、僕は何も言えなくて、藤崎涼の言葉に甘えることとなった。

## 第六章 現実の世界 エピソード3 その4

帰り道知ったのだが、意外に藤崎涼の家は僕の家と近いということ。そして僕たちはニルトニア物語の話で土砂降りの雨の中、大いに盛り上がった。

どんなモンスターを倒したか、だとか、どこの場所へ行ったかとか、どんな職業についているかとかとにかく、話はつきない。

僕は学校から結構離れた場所に住んでいるのだが、時を忘れる、とはこういうことをいうのだろう、あつという間に家まで着いてしまったような気がした。

もちろんそれは錯覚で、僕があまりにニルトニア物語の話しに熱中していたからに他ならなかったのだが。

藤崎涼は、僕より学校に近いところに住んでいたのだが、わざわざ僕の家まで傘に入れて送ってきてくれた。

「ありがとう。藤崎君」

その頃には僕もすっかり藤崎涼とうちとけて、まるで、幼馴染のように仲良くなっていた。

「ねえ、高井君、僕、君のこと、二人っきりのときは、優って呼んでいい？」

「えっ！」

唐突な藤崎涼の申し出に、僕は面食らった。

「あ、別に無理にっていうわけじゃないんだけど…。僕、始めてニルトニアやってる人と話せて嬉しかったから、これからもまた話して欲しいなって、思ってた…」

一体、学校の中で知らない人のいない、有名人であり人気者の藤崎涼が、僕にこんなことをお願いするだなんて誰が想像できただろう。僕はまた顔が熱くなってきたのを感じたので、少し斜めを向いた。



「う、うん。いいよ。僕はかまわない」

「ありがとう！　じゃあ高井君、じゃなかった、優も、僕のこと、涼って呼んで」

涼！　僕が藤崎涼のことを？

僕は動揺しているのを隠して、一生懸命普段どおりに振舞った。

「分かった。二人っきりのとき、僕は君を涼って呼ぶ」

僕のその言葉を聴いて、藤崎涼はにこにここと笑った。

藤崎涼を見送って、家に入って、どうやって自分の部屋までいったのか覚えていない。

とにかく、昨日の僕と今日の僕はまるで違うということが、僕の思考をぐちゃぐちゃにしていた。

昨日の僕と今日の僕。

そのふたつの間に線を引いたのは一体何だったのだろうか？

違っていることは何もなかったはず。

普段どおり授業を聞き流して、空を見上げて、教科書の下にニルトニア物語の攻略本を忍ばせて……。

そうやってぱりどうしても思いつくことは、レインのおまじないだけなのだった。

## 第七章 ニルトニアの世界 エピソード4

毎週金曜の夜9時から。

その時間は、ニルトニアで、さくらコミュニティが、特別攻略日と決めて、何かみんなで一緒にやる日であった。

何をやるか、戦術はどうするのか、そういったことは事前にレインと僕が相談して決めていたのだが、今回はすっかり忘れていた。でも今日の僕は、そんなことが些細なことだと思えるほど、気分が良かった。

藤崎涼のおかげだ。

僕は普段と変わらず9時前にゲームにインした。

『こんばんはー』

『ちわーっす』

『ども〜』

『こんばんは』

『ちーっす』

まだ9時前だというのに、けっこうな数の挨拶が返ってきた。

『シオン〜。今日は何やるの〜?』

『それが決めるの忘れちゃってさあ、レインに適当にきめてもらおうかと……』

『えー、シオン僕一人で決めるの?』

レインのふくれっつらが見えるような気がしておかしかった。

『わりいわりいって。僕だって忙しいんだよ。』

ま、でもまだ9時前だし、今から決めてもいいしな〜。

どう? レベル100までいった経験値をレベル1まで下げ大会とかさ』

『やだー。どんだけ死んだらそこまで行くのよ。趣味悪う〜』

『じゃあマリナだけおいて、強いモンスターたくさんつれてきてみ

んなで帰るっていうのは？」

『ありえない！ シオン今日はごきげんじゃない　なんかいいことあった？』

あ、カノジヨでもできた？」

『ノーコメントでお願ひします』

僕は、そう画面に打ち込みながら、（そうだよなあ、さすがにまさか、人生初の友達ができました！なんていえないよな）と考えていた。

『ヤダーレインかわいいそ〜〜。シオンが浮気してますよお』

『前回のミツシヨンの次のやつでいいんじゃない？』

レインはどう思っているのか、（たぶんなんとも思っていないと思う）特別攻略の内容をまじめに考えていたらしかった。

『そうだな、今日は前回の続きをやるってことで』

『シオン、浮気なんてゆるさないからねっ』

『そーそーレインという妻がいながら』

『そしたら裁判だね』

『そーそー。がっぽり慰謝料取ってくるのよ！』

今日何やるか決まると、レインとマリナのいつものお芝居が始まった。

レインは、まじめに考えていたのではなかった。

（あ、そうか。人生初の友達じゃなかった。レインが一番か…）

僕はそう考えると、藤崎涼のことで頭がいっぱいだったことを反省した。

今まで僕が、なんとかつまらない日常を毎日こなしてこれたのは、レインとの楽しい日々があったからだ。

『慰謝料って、どのくらい？　僕247ゴールドしかもってないんだけど』

『うわ、シオンが認めたよ！　浮気してるの認めたよ！』

しかも247ゴールドって何そのちょー寂しいお財布』

『じゃあ全部もらうの悪いから200ゴールドもらおうかな』

『レイン、鬼っ』

僕は、画面を見て、ふいてしまった。

(ああやっぱり僕の居場所はここなんだな)

そうしみじみ思う傍ら、藤崎涼のことをつい考えてしまうのも事実だった。

レインがいくら親しくしてくれたところで、僕の現実は変わらないけれど、藤崎涼なら僕の現実を変えてくれるかもしれない。いやそういう受身なところがよくないんだ。

藤崎涼をきっかけに僕が、クラスメートと打ち解けたら…。

そこまで考えて僕は、ばかりしくなった。

僕の名前すら覚えてくれない彼らが、僕と打ち解けるなんて有り得ない。

僕のリアルはやっぱりニルトニアかな…。

『シオン、もう9時すぎてるけど、待ち合わせは前回と一緒の場所？』

『そうだな。準備できたら、前回の場所に集合ってことで』

現実と、ニルトニア。

僕はどちらの住人だろうか？

## 第八章 現実の世界 エピソード4 その1

その日から僕の現実生活は一変した。

藤崎涼の仲良しグループの中に僕はすんなり入っていくことができ  
たし、皆も「高井君」ではなく「高井」と、呼び捨てで呼んでくれ  
るようになった。

僕は藤崎涼の大勢の友達の名前を覚えるのに必死にならなければな  
らなかった。

「なあ、高井」

「え、えーっと、何？ 澤田くん」

僕は頭をフル回転させて、話しかけてきた彼の名前と顔を頭の中で  
照合していた。

「部活とかがってなんかはいつてんの？」

「いや、入ってないよ。週に3回塾に通っているから」

塾に通っているのも本当のことだったが、僕はニルトニアでは毎  
日暮らしているようなものだから、当然部活なんてやっている訳が  
なかった。

もちろん、そんなことは言わない。

ゲームをやっているても、ゲーム中毒のオタクだと思われたくない。

僕はニルトニアに毎日いることは伏せておいた方がよさそうだと  
判断した。

「だったらさあ、俺らがほぼみんな入ってるサッカー部はいらねえ？  
部員もほとんどのこのクラスのヤツばかりで、塾の日だけ休むとか  
融通利くと思う」

「サッカー部？ 藤崎君も入ってるの？」

「いや、藤崎は生徒会やつてるから入ってないよ。でも他の連中ほ  
とんど入ってるからなんかこう内輪でさ、気楽でおもしろいよ」

「そうなんだ」。じゃあ僕も入ってみようかなあ」

僕は、藤崎涼が入ってないというのでかなり関心が薄れたし、第

一部活なんてやったらニルトニアに入る時間が少なくなってしまうので本当は全然入りたくなかった。

しかし、せっかく誘ってくれているのに断るのは悪いような気がしたので、つつい曖昧に返事をしてしまった。

「じゃあさ、早速今日の放課後からやるうぜ。って今日塾の日だったりする？」

「いや、今日は塾の日じゃないけど……」

「じゃあ決まりだな！ 放課後体操着に着替えてグラウンド集合で澤田君が強引に決めてしまったので、僕の意見を言う間もなく、僕はサッカー部に所属することになった。

（あーあ、ニルトニア入る時間少なくなっちゃったなあ。

それよりサッカー部って僕やってけるのかな……）

\*

僕の心配をよそに放課後の時間がやってきた。

僕は言われた通り、体操着に着替えてグラウンドへ向かった。

グラウンドは、強い風に砂がふかれて舞っていた。

そして、グラウンドのサッカーのゴール前にもうすでに大勢が集まっていた。

僕がそこへ入っていくと、澤田君が僕の肩に手を乗せて僕を紹介した。

「えっと、今日からサッカー部に入ってくれる高井君です。

みんなよろしくね。

あ、それから高井、僕が一応部長で、村上が副部長って事になるから、何か分からないことあったら聞いて。まあ別に、他の部員たちでもいいんだけど。言ったとおりほとんど2年2組で構成されてるからさ。

あとてきとーに自己紹介だけやってもらおうかな」

澤田君に促されて、僕はごくりとつばを飲み込んで、一步前へでた。

「今日からサッカー部にはいらせてもらおう高井優一です。みなさん、よろしくお願ひします」

僕は緊張しながら言った。

確かに周りを見渡せばクラスメートが大半をしめていた。

でも、藤崎涼はいない。

それだけが僕の心を曇らせた。

「よろしく、高井」

「よろしくねー」

皆が次々僕に挨拶をしてくれるので、僕は今までとは全然違つとびつくりした。

まるでニルトニア物語にインしたときに、皆が挨拶の返事をくれるようだ、と僕は思った。

そして、藤崎涼のとりまきもたくさんいて、それが良かったのだろう、僕の事はすでに友人と想つてくれているのかもしれないなかつた。

「んじゃ今日は高井君が入ってくれたんで、ちょうどメンバーが十四人になったから、本当はサッカーは十一人でやるものだけど、そこはしょうがないんで、7対7に分かれて、練習試合をしたいと思ひます。」

皆はすでに決まつてるポジションについてやってください。

高井は…そうだな、まだどんなポジションが合っているか分からないから、適当に動いてくれればいいよ」

「ポジション？」

僕はあわてて、聞き返した。

「そ、フォワードとかミッドフィルダーとかディフェンスとかね。

まあ最初は慣れないだろうから適当に動いてくれればいいからさ」

(フォワード、ミッドフィルダー、ディフェンス……)

いきなり僕の知らない専門用語がでてきたので、僕は混乱した。

体育は苦手ではなかつたけれど、サッカーなんて全然興味なかつた僕は、サッカーのルールや専門用語を全然知らないのだった。

かといつて一から聞き出したら、時間も取られるし、皆もう準備に

入っていたので、僕も皆のようにコートの中に入って行った。



第八章 現実の世界 エピソード4 その1（後書き）

サッカーのことよくわかってないです（汗）  
日本代表戦をみるくらいです。

なので、あんまりサッカーの描写かけてないっていうか、まったく  
ないですね、はいすみません。

じゃあ書くな、とか言わないでくださいね>><

## 第八章 現実の世界 エピソード4 その2

初めてのサッカー部をどうやってやりきったか記憶にない。

それぐらい僕は一生懸命で、必死だったのだ。

ただ、部活が終わった後に、部長の澤田君が、

「高井って、ディフェンスタイプかと思ったのに、フォワードが適してるんだな！」

意外だよ。果敢にゴールに攻めていって、上手にシュートがうつるんだもん」

と、コメントしてくれた。

「それは、僕にボールをくれる他のメンバーが、的確に僕の位置にボールを持ってきてくれるからです」

と、僕は言った。

「それがミッドフィルダーの役目だからさ。

高井って結構戦力なるかも」

部長の澤田君に褒められて僕は悪い気はしなかった。

むしろ普通の中学二年生らしく部活なんかやって、それでみんなと仲良くなって、部長の澤田君に褒められて……という過程が嬉しかった。

（そうだ、僕は本当は、現実の世界でだって、ニルトニアにいるときみたいに皆と仲良くやっていきたかったんだ！）

僕はずっと認めたくなくて、避けてきた現実に初めて向かい合った。

\*

それから僕も塾のない日は遅くまでサッカー部の部活動に明け暮れた。

そうして、自然、ニルトニアにインする機会もあまりなくなっていた。

僕は、現実世界で友達を作ることが出来たのだ。

ニルトニアの存在は、少し、僕の中で薄れてきていた。そんなある日だった。

部活動の後、教室で同じ班の相川君が僕に声をかけたのは。

「あのさ、高井、あのときの事、覚えてるか？」

ほら、班の田中がおまえの名前間違つて高木って呼んだ時……」

僕は、急にそんなことを聞かれて戸惑ってしまった。

しかし、それは、忘れることのできない寂しい思い出となっていたので、僕は、うん、と頷いた。

「あれさ、ごめん。俺ももつと堂々と注意したかったんだけど、なんか今度は自分が浮いちゃいそう、言えなかった、ほんとゴメン」

相川君が心底すまなそうに詫びるのを見て、僕は、ああ、皆一緒なんだ、と思った。

集団の中で一人浮いた存在になりたくない。

誰かと一緒にいたい。

「……………僕だつてそう思っていたんだ。

「相川君は悪くないよ。誰だつてそうだもん。ありがとう」

「……………そっか。俺の方こそありがとう。

つて謝つたついでつて言つたらおかしいけど、うちのパソコンが今調子悪くてさ、高井つてそういうの得意だろ？　もしよかったら、今度の金曜の部活終わった後…、そうだな夜9時くらいにうちにきてみてもらえないかなあ。お礼はするからさ」

僕がニルトニア物語をパソコンでやっているのは、すでにクラス内で周知の事実であつたから、相川君がパソコンに詳しいだろうと思つうのも道理だつた。

しかし……………。

僕は少し考え込んだ。

金曜の夜九時からといえば、ニルトニアのさくらコミュニティの特別攻略日の時間である。

ニルトニアに入る機会が減ってきていたとはいえ、一応リーダー的な位置にいる僕は、特別攻略日の日だけは、ちゃんとインしていた。「なんか急をお願いしてすっげー悪いと思うんだけど、どうしても金曜までにパソコンが直らないと困るんだ。なんとかならないかなあ？」

相川君は、両手を合わせて、頼む、という仕草をした。

それが、心底こまっているようだったので、僕は断ることが出来なかった。

「いいよ。金曜の夜9時だね」

「ありがとう。助かったよ。恩に着る」

僕が承諾すると、相川君はとても嬉しそうに笑った。

## 第九章 ニルトニアの世界 エピソード5

『こんばんは』

僕はその日、用事があるから、といって、サッカー部の練習を断つて、ニルトニアにインした。

『シオンくずいぶん久しぶりじゃん。』

そんなにカノジヨとラブラブなのお？』

『そそ、マリナも早くいいカレシ作りなよ』

さくらコミュニティの人たちは、僕に彼女が出来て、最近あまりインしなくなったと思っっているらしい。

(というかマリナが、彼女出来た説を強く断言しているので、皆もそう思っただけかもしれない)

まあ友達が初めて出来た、と思われるよりずっといいので、その誤解は解かないままでおこう、と僕は思っていた。

『でさあみんなに悪いんだけど、今週の金曜の特別攻略日なんだけど、僕用事が出来て、これなくなったから、ごめん。』

レインに任せてもいい？』

『いいけど、用事って何？ 気になるなあ』

『あたしも気になるう。なににな』

レインとマリナの二人から好奇心の目で見られているような気がして、僕は参ってしまった。

『ただ、友達のパソコン直しに行くだけだった。』

二人とも好きだなあ。そういうの』

『あつたりまえじゃない！ レインほつたらかして浮気してるんだもん。気になるよねえ？ レイン』

『そうだよ。シオン。浮気なんてひどい。めそめそ』

『かわいそうなレイン、裁判でいっぱい慰謝料もらおうねっ！』

『って浮気じゃないだろ！』

僕はそう言いながらも、ニルトニアにあまりインしなくなって、皆

に悪いなあと思っ  
た。

……特に、レイ  
ン。

僕の生涯初めての友達にして、ずっと僕の心の支えでもあったレイ  
ン。

彼にすまないと思っ  
ていた。

しかし、本当のところをいうと今は現実の世界が楽しくてしょうが  
ないのだった。

藤崎涼が声をかけてくれてから一変した僕のもつまらなかつたリアル  
の世界。

僕はもうニルトニアに逃げなくてもよくなったのだ。

けれど大事なものは失って初めて気づくもの。

その時の僕はちっともそんなことに気づいていなかったのだった。

## 第十章 現実の世界 エピソード5 その1

相川君に頼まれたパソコンを修理したり、サッカー部で、汗まみれになって練習したりしながら、僕の毎日はたくさんの方友人たちに囲まれて幸せだった。

(だけど、これじゃいけない)

藤崎涼に声をかけてもらって、クラスの皆も親しくしてくれて、僕は全部誰かに助けってもらって、今こうしている。

僕は、嬉しい反面、こうやって現実世界を楽しく過ごせるようになったことが、全て他人に差し出されたモノによってできてしまったことに、自分のふがいなさを感じていた。

確かに、僕なんかが クラスメイトと一年近くかかっても打ち解けられなかった、人間関係を作るのが下手な僕なんかが、誰の助けも借りずに、今更クラスでうまくいくはずないってことくらい、誰から見ても明白だったかもしれない。

でも、僕だって、少しくらい勇気を出して、自分から、閉じこもっていた殻を破りたい。

最近そう常々思っていた僕は、その日の1時限目が終わった後、藤崎涼に声をかけた。

「あ、あの、藤崎君」

二人っきりのときは、涼と呼んでほしいと、彼は言っていたが、今はたくさんの方のクラスメイトのいる中。

藤崎君、と呼ぶのが適当だろう、とぼくは考えて、勇気を振り絞って藤崎涼の背中に声をかけた。

「何？ 高井君」

藤崎涼は、にこやかに微笑んで、くるりと僕の方に振り返った。

「あの、明日の社会の小テストなんだけど、僕年号覚えるの苦手で…。よかつたら今日の放課後、勉強、教えてくれない？」

僕は、いつも学校の廊下に、テストの結果がはりだされるのを見て

いたが、藤崎涼が学年のトップじゃなかったことなんてなかったのではないだろうか。

本当は勉強なんてどうだってよかったけれど、藤崎涼を僕の方から誘う口実がそれ以外思いつかなかった。

断られるだろうな…、学年トップの彼が、わざわざ小テストのために、僕なんかのために…。

「いいよ。そういえば、来週小テストだったね。僕も勉強したいし」  
うつむいていた僕は、反射的に顔をあげていた。

そこには変わらずにこにこと笑っている藤崎涼がいた。

「い、いいの？」

「今日の放課後だね？ 生徒会あるけど、さぼっちゃおう。なんて言い訳しようかな…」

藤崎涼は、少し考え込むふうにした。

そうだった。藤崎涼は生徒会の副会長をやっていたのだった。

「いいよ、生徒会のが大事だから。また今度で」

僕は慌てて言った。

副会長がいなかったら、生徒会、困るんじゃないか？

「ここだけの話だけどね、生徒会、先生にほぼ無理やり推薦されてやってるだけなんだ。ほんとはやりたくなかったし、第一、高井君と一緒に過ごしていたほうが楽しいから」

へえ…無理やりやらされていたのか…って、そんなことより、僕と過ごした方が楽しいって、今、彼は言わなかったか？

そこまで思考が働いたとき、僕は顔があつと赤くなるのを感じ、うつむいた。

「全然気にしないで。何か用事ができたことにするから。放課後、楽しみにしてるよ」

「あ、ありがとう」

僕が、ごもごもと小さな声で、なんとかお礼を言っていると、次の授業が始まるのを知らせるチャイムが鳴った。

「じゃあ、また放課後ね」



藤崎涼はそう言っつて、前を向いて、机の中から次の数学の教科書を取り出した。

それを見て、僕も急いで、自分の席に戻った。席に戻った後も、僕の心臓はドキドキしていた。

（確かに、自分から殻を破りたいって思ってたけど…最初の一步にしては、少し大胆すぎたかな）

今更になって、僕は怖気づいていた。

だって、いくらニルトニア物語やっている同士仲良くなったといっても、藤崎涼といえば、学年関係なく知れ渡っている、頭が良く、スポーツ万能で、女子に一番人気で、告白されているのもしょっちゅうだという噂を聞く学校一の人気者なのだ。

片や僕は、最近まで空気のような存在だった冴えないただのクラスメートで……。

こんな不釣り合いな僕のために、わざわざ生徒会まで休んでくれて……。

（いけない、いけない！ そんなマイナス思考が僕のいけないところなんだ。自分から殻を破るって決めたじゃないか）

僕は、なんとか自分を鼓舞して、自分自身に言い聞かせた。

数学の教師が、授業を始めていたが、今の僕にはBGMくらいにか聞こえていなかった。

（僕は、自分から変わるんだ！）

## 第十章 現実の世界 エピソード5 その2

放課後。

僕は、生徒会の人に、休みをもらいにいつている藤崎涼を待っていた。

社会の教科書を出して眺めていたものの、落ち着かなくて、気づかずに、僕の視線は、空へ向かっていた。

（ああ、今日は気持ちのいい青空だ）

「優は、また空を見ていたの？」

クスクスと背後で笑い声が聞こえて、振り返ると、藤崎涼が立っていた。

彼が教室に戻ってきたのも気づかないくらい、空を見るのに熱中してしまっていたのか。

僕は少し恥ずかしくなった。

クラスメートは、もう帰るか部活動に行ってしまったっていて、教室には二人きりだった。

だから、藤崎涼は、朝とは違って、僕のことを優と呼んだのだろう。確かに、ニルトニア物語をやっているのは、藤崎涼の近くには僕しかいなかったのかもしれないけど、何故僕だけ特別扱いでそんな呼び方してくれるのか、それが謎だった。

「さて、早速始めようか。」

室町時代の終わりから、安土桃山時代の初めだよ。年号覚えるのが苦手なんだっけ？」

「あ、う、うん」

「じゃあキリスト教が、一般的に広まり始めた年号は？」

（う…、いきなり分からない）

僕が考え込む様子を見せたので、藤崎涼は答えを言った。

「1549年。以後よく広まるキリスト教って覚えると、覚えやすいよ」

「なるほど、それは覚えやすいね」

僕は急いで、ノートを取り出してメモした。

「じゃあ次、本能寺の変があったのは？」

(う…また分からない)

「1582年。これはいちこのパンツって覚えると……」

藤崎涼の説明が終わらないうちに、僕はぷーっと噴出してしまった。

「あーもうっ。優、真面目にやってるんだよ」

「ゴメンゴメン。でも、いちこのパンツってさ、あはは」

僕が大笑いすると、つられて藤崎涼も笑った。

「確かにちよつと恥ずかしい」

「でしょ」

僕は、つばにハマってしまったのか、いつまでも笑い続けた。

信長には悪いけど、いちこのパンツで殺されちゃたまらない。

僕が気づくと、藤崎涼が頬杖をついて、僕の顔を熱心に見つめていた。

「あ、ごめん、ごめん。話の腰を折っちゃって……」

「そうじゃないよ。」

優はいい顔で笑うようになったね」

「そ、それは、ふじさ…涼のおかげな訳で……」

「そんなことないよ。今日だって優の方から声かけてくれたじゃない。僕、嬉しかった」

「僕、涼に声かけてもらってから、クラスの皆とも仲良くなること  
ができて、毎日が楽しいんだけど、どれも皆が手を差し伸べてく  
れる訳で、僕自身から変わった訳じゃない。だから、今日は思い切  
って涼を……」

僕は、そこまで言い切ると、俯いた。

「十分、優は頑張ってる」

藤崎涼がそう言ってくれたとき、僕の、自分から変わらなければ、  
と自身にいい聞かせていた重いものが、ふっとなくなったようなき  
がした。

「涼は、何で、僕にだけ涼って呼ばせるの？」

そして、口をついてでたのは、さっき、僕が考えていたことだった。  
「んー、優は僕にとって特別だから…かな」

（特別…）

その意味をはかりかねて僕が、また質問しようとしたら、藤崎涼が先を越した。

「また、いつか話してあげる。」

さ、今日はこの辺にして帰ろうか。また帰り道ニルトニアの話でもしようよ

「うん」

ふと外を見るともう夕方になっていた。

特別か…何だか、信じられないけど、きっと藤崎涼はニルトニアが大好きなんだろう。

その時の僕は、そんなことくらいしか理由が思いつかなかった。

## 第十一章 ニルトニアの世界 エピソード6

その日も、サッカー部の練習で遅くなった僕は、久しぶりにニルトニアにインした。

部活で毎日遅くなるのは、補習があるから、とっておいたので、親は何も言わなかった。

しかし、部活の後、すっかり疲れてしまう僕は、帰宅してからもニルトニアにインしない日が続いていたのだった。

『こんにちは。お久しぶりです』

僕が挨拶するやいなや、マリナや他のメンバーからのメッセージが次々、画面に表示された。

『ちよつとお、シオン。ホントに最近こなかったから、レイン、ニルトニアやめちゃったんだよ！』

さつき、さよならの挨拶しておちていったんだから。

もう、シオンのバカ！』

マリナのメッセージを頭の中で反芻しながら、僕は大変なことになってしまったと、徐々に頭の中が凍りつくような感覚に陥った。

（レインが？ レインがニルトニアをやめただって？ それが僕のせいで……）

僕のつまらない現実をゲームの世界だけでも楽しく過ごさせてくれたのは誰だった？

初めての友達だと僕が思っ、いつも一緒にいてくれたのは誰だった？

マリナの言うとおり、僕は大バカだ。

—————僕の冴えない現実を変えてくれたのは、レインだったのに。

マリナはもうレインがさよならの挨拶をして、おちたのだといったが、僕はまだレインがニルトニアにいるような気が、なんとなくなくしていた。

(早く！ 早くレインに逢わなければ)

レインが行くとしたら、この広大なニルトニアの世界のどこだろう？  
ゲームをやめる前に、最後に行っておきたい場所は……。

僕は、よし、と決めて、ある場所へ向かった。

そこはたくさんの花が咲き乱れる教会。

そう、マリナ達が、僕とレインと結婚式をあげたら？ とおもしろ  
がっていた教会だ。

赤、青、黄色、色んな色で咲き乱れている花に囲まれた、レンガ色  
の小道を進んでいくと、そこに教会がある。

教会の前で、僕は、金色の髪に、銀色の盾、控えめな金色の剣を持  
った、見覚えのある人物と出会った。

……レインだ。

僕は、レインになんと声をかけていいのか分からなくて、レインの  
前にただ呆然と突っ立っていた。

『シオン、僕ね、今日でニルトニアをやめるんだ』

先に口火を切ったのはレインだった。

『なんで！ なんでやめるんだ？ 僕が最近あまりインしていなか  
ったから？』

だとしたら僕、もっとインするようにするから、やめないでくれよ、  
レイン』

『違うよ、シオン。シオンは関係ないんだ。』

ただ僕が、現実世界で、楽しくやっていけそうだったから。

ニルトニアも十分楽しかったけどね。でもそれ以上に、リアルが楽  
しくなりそうな予感がするんだ』

レインは、少し楽しそうに話している気がした。

『だからって、何もニルトニアをやめることないじゃないか！』

もうレインには会えなくなるんだ。どこに住んでいるかも分からな  
いんだから、ここで別れたらもう一生会えないじゃないか！』

僕は、画面を見ながら、泣いていた。

金髪のレインと、黒髪の僕のキャラが、涙でにじんで歪んで見えた。

『シオン、一生会えないなんてことはないよ。またきつとどこかで巡り逢える』

『そんなの無理に決まってるだろ！

いい加減なこと言わないでくれよ』

『大丈夫。僕を信じて。そろそろ僕は行くよ。

じゃあまたね、シオン』

そう言うと、レインの姿がパソコンの画面から消えた。

『レイン！ レイン！』

僕の呼びかけに答える人は、もう誰もいない。

レインという人物とは、もう二度と巡りあうことができないだろう。

そう思うと、僕は悲しくて悲しくて、涙が止まらなかった。

レインがどこに住んでいるか、レインの電話番号、メルアド、僕は

何にも知らないのに。

またきつとどこかで巡り逢えるなんて、気やすめを言って、レイン

は僕の元から去ってしまった。　　――　　永遠に。

## 第十二章 現実の世界 エピソード6 その1

レインがニルトニアをやめた次の日の朝の天気はどんよりとした曇り日だった。

同じく僕の心もどんよりしていた。

レインと二度と会えないのだ。

自然気持ちも落ち込んでくる。

(今日はサッカー部も休もう)

体調が悪いから、と言って、休みをもらったら、部長の澤田君を始め、サッカー部員の皆から心配されてしまった。

昔だったら、こんなことは考えられない。

つまらない現実と、楽しいニルトニア。

そんな図式だったのに、ここ一ヶ月くらいで、瞬く間に、その図式は反転してしまった。

放課後、僕はサッカー部員の見つからないように、そっと屋上へ行った。

空を見上げると、朝はどんよりした天気だったのに、すっかり晴れていて、夕焼けが美しかった。

「優、また屋上に来て空を見ていたの？」

「サッカー部の練習は？」

藤崎涼に見つかって、僕はばつが悪そうに振り返った。

「さぼっちゃったよ。」

今日は落ち込んでいるから」

僕は藤崎涼から視線をそらせて言った。

「どうして落ち込んでいるの？」

「それは……」

僕は口ごもってしまった。

藤崎涼に言ってももしかたのないことなのだ。

「僕にも言えないんだ？」



藤崎涼は僕に顔をすごく近づけて、耳元で囁いた。

「もう会えない人がいるんだ」

僕は泣きそうだった。

その時、藤崎涼が、信じられない言葉を僕の耳元で囁いた。

「また会えたじゃない。シオン」

それを聞いた瞬間、僕の頭は真っ白になった。

(え、今、僕のことをシオンって?)

僕は一瞬ぼかんとしてから、藤崎涼に詰め寄った。

「レイン? レインなんだね、涼は!」

僕が藤崎涼の肩に手を乗せて尋ねると、藤崎涼は楽しそうに笑った。

「そうだよ。隠しててごめんね」

「ごめんねって……。謝りたいのは僕の方だよ。」

どうして僕がシオンだって分かったの?

レインはリアルが楽しくないって僕が言ったから、助けてくれたんだね」

僕はもう涙を止められなかった。

「泣かないで、シオン。」

えっと、何で優がシオンだって分かったか、はね、ほら、空を見るのが好きって言ってたでしょ? 優はいつも空を眺めていたもんね。

それにニルトニア大辞典を見ていた。

だからたぶん、シオンなんじゃないかなあって」

「レインのバカバカバカ!」

ほんとに……。もう……。会えないって……。思ってた……」

僕は、しゃくりあげながらレインの肩をたたいた。

「泣かないで。優」

レインはそっと僕を抱きしめた。

レインの細い腕が僕の体に回される。

僕は、ほっとした安心感と、レインに抱きしめられて、顔がかあつと赤くなるのを感じていた。

(でも……。イヤ、じゃない)

ニルトニアで一緒のときは、どんなに近くにいるように見えても、  
レインの温もりは感じることはできなかった。パソコンはどこまで  
も無機質で……。

……今、僕は確かにレインの温もりを感じていた。

## 第十二章 現実の世界 エピソード6 その2

「何でニルトニアをやめたの？」

僕があまりインしなくなっただから？ 僕のせい…？」

僕より少し背の高い涼の胸に顔をうずめて、レインの顔を見ないで僕は尋ねた。

「違うよ。優のせいじゃない。

優はニルトニアで、現実世界がつまらないって言ってたでしょ？

優は一人でいるのが好きだと思って、僕、声をかけなかったんだけど、それが、シオンだって分かって、そしてつまらないんだって分かって。

僕の方こそゴメン。辛かったよね…。

僕がもつと早く気づけていたらって、自分を責めたよ。優を一人ぼっちにした。大親友の優をね。

だから、優が皆とけこんで、サッカー部なんかで楽しそうにやっているの見たら嬉しかった。自分から変わらなきゃって、僕を誘ってくれたときも。

ニルトニアでも十分優と楽しく過ごせるんだけど、せっかくこんな近くににいるのだから、リアルでもつと優と楽しく過ごしたいって思っただ。

それがニルトニアを辞めた理由。

ニルトニアが嫌になっただけでも、シオンがインしてこなくなっただからでもないよ」

僕はそーっと顔をあげた。

薄茶色の細い髪の毛を風に揺らせて、少女のような顔の涼は、目を細めて笑っていた。

「レイン……」

僕の言葉が最後まで発せられる前に、レインが僕の口元を押さえた。「今はニルトニアにいるんじゃないんだよ。だから、僕のこと、涼

って呼んで」

「…涼。僕、現実では全然根暗でかつこ悪かっただろ？」

「ぜんっぜん、そんなことない！」

だって、シオンだって優だって、同じ人物じゃない。いつだって、どこにいたって、僕の大親友には変わりないんだよ」

僕は、また涙を流していた。

それは、驚きの涙でも、感激の涙でもなく、ただ、嬉しい涙だった。「でも、ちよつと今印象変わったかも。」

ニルトニアでは、頼りになって、いつだって強いシオンだったけど、こんなに泣き虫なんて、ね」

ふふ、と涼は笑った。

僕は、涼の腕から離れて、涙を拭った。

そこにはまるでいたずらっ子のような涼がいた。

「それは、悪かったね！」

僕だって、レイン…涼が、こんなにイタズラ好きだなんて知らなかったよ。

僕のことだまして笑ってるんだから」

「ゴメンゴメン。騙すつもりはなかったんだよ。ただ、確証が持てるまで、しばらく待っていただけで…」

涼は、僕が恨めしげに睨んだので、あわてて両手を振った。

それがおかしくて僕もいつしか笑っていた。

「でも、良かったあ。レインにもう二度と会えないと思ってたのに、ホントにまた会えた」

僕は屋上の床にへたりこんだ。

落ち込んで、びっくりして、安心して、嬉しくて……。僕の感情はめまぐるしく、この5分くらいの間に変化した。

涼も床に座り込んで、僕たちは見つめあった。

「シオンがピンチのときは、いつだって駆けつけるって、ニルトニアで言ったでしょ。」

僕はシオンを守る騎士なんだから」

僕のつまらない日常を、涼は変えてくれた。

ニルトニアにいても、リアルにいても、僕を助けてくれた。

「……どっちのレインもレインなんだ。」

涼が言った言葉が、僕にも理解できた。

「僕のおまじない、効いたでしょ？」

レインがニヤニヤしているので、僕もつられて笑った。

「そうだね。」

「……ありがとう。」

これからも、よろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

誰もいない屋上で僕たちはいつまでも笑いあっていた。

そして、心の中でもう一度僕は言うのだった。

（ありがとう、レイン。）

ありがとう、涼）

## 第十二章 現実の世界 エピソード6 その2（後書き）

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました！

処女作ですので、文章もストーリーも拙くて読むの大変だったと思います（汗）

ほんとーに、ありがとうございましたー！！

もしよかったら感想とかいただけると嬉しいです。

質問等もお待ちしております^^

もし、ないと思うのですが、需要がありましたら、「ニルトニア物語 高校生編」を書こうかと思えます。

まあ心配しなくても、そんな需要ないと思うので、永遠に日の目を見ることはないでしょうw

高校生になった、優と涼見てみたい！というレア読者さまが何人かいらっしやったら…書いてみようかな…。ていうか、今回でオンラインゲーム卒業しちゃったのに、また「ニルトニア物語」でどうなるんでしょう（笑）

あと、気になっている方、いるかいないかわかりませんが、ニルトニア物語はどのRPGをばくっているのか？w

60%FF11、30%モンハン、10%ドラクエって感じですかね…。

あれ、モンハンはRPGじゃないかも？、まあそこはそれでw  
すいません、いい加減な性格です。

イラストを載せようと思ったのですが、第三者のイラストは載せてはいけないとありましたので、個人のブログに載せてあります。  
興味のある方、ブログへいらせられませ^^

お待ちしております。こちらがアドレスになります。

<http://ameblo.jp/lovecherrys/>

それでは、またお会いできる日まで。

和泉 彩

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5039s/>

---

ニルトニア物語

2011年5月8日22時17分発行